

# 私の京都新聞評

大隅 直人

2016.12.25

インターネットが普及してから20年経ち、現在、ネット上には60兆ものウェブページが存在するという。何でもスマホで検索するという所作の蓄積が、人工知能を賢くさせ、その結果、われわれの生活はどのようになるのか、予想もつかぬ昨日あるが、批評を依頼され、この1ヶ月ほど自覚的に読んでみると、新聞というメディアには、まだまだ可能性があるとつよく感じた。

11月29日から12月2日にかけて地



域・総合面などで4回にわたって掲載された、北陸新幹線の大坂延伸をめぐる「論点を聞く」は、いずれも中身の濃い、じっくり読み込む価値のある記事だった。

このトピックについて、これだけまとまった情報をネットで集めるのはかなり大変である。それだけでも、このような特集の意義はとても大きいと言えよう。

4名の専門家による各ルートの費用対効果をめぐる分析や、中長期的

インターネットが普及してから20年経ち、現在、ネット上には60兆ものウェブページが存在するという。何でもスマホで検索するという所作の蓄積が、人工知能を賢くさせ、その結果、われわれの生活はどのようになるのか、予想もつかぬ昨日あるが、批評を依頼され、この1ヶ月ほど自覚的に読んでみると、新聞というメディアには、まだまだ可能性があるとつよく感じた。

視野に立った様々な指摘は、この問題を、決して目先の利益だけで考えてはならないということを、私たちに教えてくれている。

しかし、難点もある。せっかく4回ある記事間の連関性が、読み取りにくいのだ。4名の記者が同じ方針や質問をもつて取材をする必要はないと思うが、それならそれで、編集の手腕がもつと振るわれてもよいのではないか。

専門家と市民の架け橋となること。これは、市民社会が新聞や出版に期待する、重要な使命である。自分に期待する、重要な使命である。自分が心の支えだった、といったようなことを書いていた。

19歳の春、京都で下宿生活を始めたあたって、私は生まれて初めて自分で新聞を購読した。

その頃、ある映画監督が紙面批評を担当していた。うろ覚えであるが、彼は、自分がまだ若かった頃、世情があまりにも暗く絶望的なので、新聞の天気予報の欄を眺めることだけが心の支えだった、といったようなことを書いていた。

当時、自分はそこまで感傷的ではなかったが、心の支えだった、といつたようなことを書いていた。

## 読者に伝わる編集の工夫を

戒の念も込めてであるが、責任ある編集が、勇気を持ってなされるべきではないかと思う。

12月1日から社会面で3回掲載された「大人の条件」第6部は、今年、投票年齢が18歳に引き下げられたのを機に組まれた特集で、10代の若者たちが直面する現実を、丁寧な筆致で描き出す。細かなディテール可能な限り書き込みつつ、注意深く紋切り型を避けながら綴られた文章は、読んでいてとても心地よい。

そして、「大人って何?」という、われわれ大人たちに向かつて開かれ

ないなど、軽い気持ちで思つた記憶があるが、49歳になった今、彼の書いていたことが、少しわかるような気がする。

私は大人になつたのだろうか。この問い合わせを抱えながら、半年間、紙面と対峙してみたいと思う。

(大隅書店代表)

大隅さんの担当は全6回。次回は1月22日に掲載します。

おおみみ・なおと 1967年北海道生まれ。京都大文学部卒。出版社勤務を経て、2010年に大隅書店を創業。大津市在住。

2017.1.22

# 私の京都新聞評

大隅 直人

私は札幌で生まれ、東京で育ち、

大学入学時に京都に越して来た。

以後20年間京都市内に住み、現

在は大津市内で暮らしているが、現

今も東京出張の折には「京都は良

い所ですよね」とよく言われる。

1月3日朝刊6、7面に掲載さ

れた新春座談会「文化のチカラ」

では、京都に拠点を置きながら伝

統文化ではなく現代文化の担い手

として全国的に活躍する4氏が、

京都について、それぞれに思うと

ころを自由に語り合っている。



4氏ともに、京都の悪い所ではなく、良い所の方を、あくまでもポジティブに捉えていて、とても面白く読めた。

さらに、最後に「あえて苦言を」

という形で、それだけではない微妙なニュアンスも聞き出すなど、妙風通しの良い好企画だと感じた。願わくは、まだこの4氏ほどには有名でなく、彼らよりもさらに若く、さまざまなチャレンジをしている人たちと地域のかかわりについて、今後も丁寧に報じてもら

えればと思う。

1月3日から9日まで7回にわ

たつて(滋賀)地域面に掲載され

た「淡海にかける橋」は、「ママ

たちと地域」「生産者と消費者」

「湖魚と若者」といった切り口で、

地域に根ざしながら、より広い場

所とのつながりを志向する滋賀県

内各所の動きを、バランスよく取

り上げていた。

いずれの回も、伝えたいことが

明瞭であり、添えられた写真も良

く、楽しく読むことができた。

とはいって、ふだん京都新聞を読

人はなぜ本を読むのか。

なにか困ったとき、答えを与える本がある。

その一方で、答えではなく、問い合わせてくれる本もある。

人は、自分でもなんとなく理解

しかけていることを、自分よりも

よく考えている人、よく知っている

人の助けを借りて言語化できた

とき、問い合わせを明確なものとして立

てることができたとき、腑に落ち、行動を起こすことができる。

新聞は事実を丹念に集めたもの

であるべきであるのと同時に、と

## 地方の現実 率直に語つて

んでいて、物足りなさを感じると  
ころがないわけではない。

端的に言って、地域面に掲載される記事はベタなものが多い一方で、紙面全般、特に大局的な記事において、滋賀は「京滋」という言葉で括られてしまつて、深く語られることが多い。そのため、地域の現実について、率直に語る言葉を掬うことは、ジャーナリストの大切な仕事なのではないかと思う。

地方の時代と言われて久しいが、地域の現実について、率直に語る言葉が決定的に不足している。どうに、私には思われる。この時代だからこそ、地方の時代だからこそ、地方にこそ、できることがたくさんあるのではないか。どうか。

こういう時代だからこそ、地方にこそ、できることがたくさんあるのではないか。どうか。

(大隅書店代表)

次回の大隅さんの評は2月26日に掲載します。

私としては、その中間ぐらいの記事を、もっと読みたいと思う。

2017.2.26

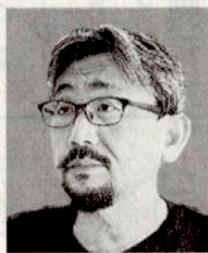
# 私の京都新聞評

大隅 直人

小学6年生の頃、新聞の切り抜きを学校に持参し解説せよという課題が出されたことがあった。

私は、両親に連れられて会いに行つたこともある上野動物園のパンダ、ランランの死を報じる記事を選び、感謝と哀悼の気持ちに、平和外交への願いを添えて、そういふ発表をした。

しかし、その時、準備しながらあらためて思い知られたのは、この世界では、小学生の自分には



報じられている。

米国に限らず排外主義の台頭につよい懸念を覚えるが、それがとくに私たちの生活に影響を与える点について、できるだけ多角的に、さらにそれらの点と点がつながるよう、十全な報道を期待したい。同じく1月27日朝刊1面に掲載された「旧宮家の皇籍復帰も」という記事は、その前日の国会での、野党からの質問に対する安倍首相の答弁について報じていた。

しかし、気になつたことがある。記事中に、首相の「男系継承が

といった項目を読むと、正確さについては留保した上で、およそのことは把握できるが、このニュースには、日本社会の行く末にかかる、きわめて本質的な問い合わせでいると、私には思われる。

ちなみに、同日朝刊2面に掲載された関連記事は、旧宮家（旧皇族）について解説したものであり、翌日以降、続報はなかつた。

広さの限られた紙面で、世界の全体を描き出すことは不可能である。

しかし書き手の努力によって、

## 多角的にわかりやすく

古来例外なく維持されてきたことの重みなどを踏まえつつ」という言葉が引用されているのであるが、この記事を読むだけでは、そもそも男系継承とは何ぞやといふことが、まったくわからないのだ。

通信社の配信記事を使っている場合でも、京都新聞として、読者にわかりやすいように加筆、修正するか、用語解説を別途つけるなどの工夫ができるのではないか。

部分の中に全體を表現することは、けつして不可能ではないはずだ。だからこそ、あくまでも質の高い記事を期待したい。

これは、本という、かつてほど作っている自分に返つてくる問いかけでもある。（大隅書店代表）

この件については、たとえば、ウイキペディアで「女性天皇」「女系天皇」「皇位継承問題（平成）」に掲載します。

1月27日にトランプ大統領が発した入国禁止の大統領令をめぐって、同日朝刊には、1面の「シリアル難民受け入れ禁止」というトップ記事だけでなく、総合面、国際面、政治面、経済面に、多岐にわたる関連記事が掲載された。

その後、2月に入つてからも、世界に与える影響や、アメリカの司法との攻防などが、連日詳細に

2017.3.26

# 私の京都新聞評

大隅 直人

少し前のこと。インターネットは紙メディアにデメリットのみをもたらすものではなく、新時代には、紙メディアとネットの共存共栄が可能になるのではないかといふ趣旨の投書が本紙「窓」欄に掲載されていた。投稿者は16歳の高校生だった。

3月6、7日の文化面に掲載された「投稿サイト発新文学」は、小説投稿サイトで公開された作品が、一般読者に選ばれ、支持を受けることで、書籍化のきっかけを得た。



つかみ、そこからベストセラーが相次いで生まれているという昨今的事情について紹介しており、面白く読めた。

双方向性というウェブの強みと集合知のパワーが、一部出版社や文壇が特権的に仕切っていた文学の世界に風穴を開けつつあるということは、痛快至極である。けれども、この記事に少々物足りないものも感じた。「書籍化」の値打ちについて、ツッコミが甘いように感じられたからである。

なにより本が売れるることは大事である。だが、書物の文化を刷新するためには、版元や編集者が媒介することの意味についてもつと吟味することが必要なはずだ。

冒頭で触れた投書で、くだんの高校生は「インターネットという身近な存在を通じ、ニュースに関する心をもつと持つてもらう」ことの可能性を挙げていたが、たとえば新聞のニュースとネット上の膨大な言説との間に、有意義なコラボレーションが生まれる余地はあるのか。私は十分あると考える。

## 配信拡充、ネットと共存を

3月1日から3日にかけて朝刊社会面に連載された「監視社会の靴音」は、南丹市美山町に住む尺八演奏家ウベ・フルターさんの個人史をまとめたものだが、旧東ドイツ生まれのフルターさんの激動的物語によって、民主主義の普遍的な価値を捉え直すだけでなく、現在の世界、最近の日本の状況にも思いを至らせる、示唆深いものとなつており、記者の力量をつくづく感じた。

ところで、すでにネット上に無料で配信されているような速報性の高い記事ではなく、こういった

プロのジャーナリストにしか書けないような文章がネット上でも、もっと気軽に読まれるような仕組みを作ることはできないものか。調べてみたところ、京都新聞に会員制のデータベースのサービスがあることが判明した。しかし、その使用料は個人が気軽に払える額ではないし、最近流行りのニュースサイトが備えているようなコメント機能などもなさそうだ。兎角インターネットは難しい。3月13日朝刊社会面に掲載された「SNSの中傷 若者脅かす」という記事が報じているように、インターネットの特性が生み出す危険や弊害は厳然として存在する。しかし、同8日の暮らし面に掲載された「他者の肯定が人を伸ばす」という記事は、記事のマクラでSNSについて触れた上で、日常でできるコミュニケーションの工夫について、ひらく書いていたところに好感を感じた。こういった地道な営為の積み重ねが、わたしたちの未来を明るくすることを信じたい。（大隅書店代表）

次回の大隅さんの評は4月23日

2017.4.23

## 大隅 直人

毎年この季節になると「4月は残酷極まる月だ」(西脇順三郎訳)というT・S・エリオットの詩句を思い出す。

3月25日から27日にかけて朝刊一面に掲載された「新文化庁のゆくえ」は、文化庁の京都移転という計画の背景には、様々な疑惑の相違や、足並みの乱れなどがあり、その前途が多難であることが多角的かつ詳細に書かれており、現時点では、手放して喜んだり無邪気に楽しみにしたりできないと



# 私の京都新聞評

いうことが、よくわかった。26日の記事で紹介されている移転のきっかけを作ったときの河合隼雄氏の発想と、それを引き継ぐ寺脇研氏の言葉は、4月3日の朝刊に掲載された赤坂憲雄氏と佐々木雅幸氏の対談とも呼応しており、その記事の小見出しにあるように「京都中心の思考を脱皮して『革命』を」という覚悟が肝要であると私なりに理解した。4月4日の文化面では、文化庁移転をめぐつて開かれた催しについて報告する

じた。初志を忘れず、報道の力によつて、今後も継続的に世論をリードすることを期待したい。

エリオットが表現したように、死と再生、過去と未来の対比が際立つ春には、たしかに残酷なところがある。しかし普通に考えれば、春は、さまざまな植物が芽吹き、胸がふくらむ季節だ。

4月3日から新連載「いしいしんじ訳 源氏物語」が始まつた。

「今の京都の人人がしゃべつているように」訳されていることについて、次回の大隅さんの評は5月28日

記事の中で、英国人企業家で一条城特別顧問のデービッド・アトキンソンによる日本の伝統文化にかんする厳しい指摘が紹介されてきたが、なにより具体的なエピソードに基いて語られている点で非常に示唆に富んでおり、同氏の真剣な思いと愛情を受け取ることができた。その他の記事も含めて、現実を直視しつつも、おそらく日本行く末に大きくかかわるこの事業につき、京都新聞として、希望と確信をもつて報じようとしていることがよくわかり、心強く感

じた。初志を忘れず、報道の力によつて、今後も継続的に世論をリードすることを期待したい。

エリオットが表現したように、死と再生、過去と未来の対比が際立つ春には、たしかに残酷なところがある。しかし普通に考えれば、春は、さまざまな植物が芽吹き、胸がふくらむ季節だ。

4月3日から新連載「いしいしんじ訳 源氏物語」が始まつた。

「今の京都の人人がしゃべつているように」訳されていることについて、次回の大隅さんの評は5月28日

しめる好企画だ。30年前、大学に入学したての頃、関西出身の同級生が伊勢物語の原文を関西アクセントで音読してくれて「わかりやすいやろ」と問われて、つよく衝撃を受けたことがある。彼は優しい男で、しばらく経つてから今度は漱石の文章を持って来て東京アクセントで読んでくれと私に頼み、江戸っ子でもなんでもない私の下手な朗読を感じしながら聴き、私のことを励ましてくれた。そんなわいのないことも思い出した。

心待ちにしていると言えば、ジ

2017.5.28

# 私の京都新聞評

大隅 直人

4月28日の文化面に掲載された「小説投稿サイトから相次ぐヒット作」という記事を読み始めて、私はすぐに姿勢を正した。というのも、この記事は、3月に掲載され本欄でも少々批判的に言及した「投稿サイト発新文学」の続報にあるものだったからだ。大塚英志氏に話を聞く形で、ネットの登場と近代文学の変容という大きなパースペクティブ（視野）のもとに、議論がより深められていた。



後半で、長引く出版不況で経費節減を優先するため版元の仕事の水準が落ちてることが指摘されており、その点については、素直に認めざるをえない。貧すれば鈍する。しかし、以前の記事と併せて読み返すと、ウェブの可能性について再認識させられ、己の視野狭窄に気づかされ、顔を上げて前を向くよう促されているような気持ちになった。記者に深く感謝したい。

京都でADI国際会議が開かれ

たことと関連して、4月下旬から認知症をめぐる記事が多数掲載された。4月30日の社会面では、「届け私たちの思い」と題し、同会議の閉会を報じるとともに、当事者たちによる講演を抄録していた。そのなかの「周囲に1人は変なことがある」と言つてくる人はいても、99人は助けてくれる」という言葉の明るさ、社会というものを信じる心のつよさに、胸を打たれる思いがした。また「支援側は『サポートナード』ではなく、水平な『パートナー』になって」という呼びかけの

## 社会の木鐸であり続けて

言葉も紹介されていたが、認知症について、正しい理解を広めるとともに、地域で支えていくように社会を作り変えてゆくためにも、新聞のはたすべき役割は大きいと感じた。会議終了後も5月4日から4回、地域総合面で「ADI京都会議から」という特集が組まれたが、最終回の「この超高齢社会日本で『あすの私』をどう支えるか。そう考えるところから始められない。認知症当事者は、その

舞台に天皇制と戦争と平和をめぐって繰り広げられてきた歴史をわかりやすく教えてくれる、このよくな連載の意義は大きいと思う。5月3日の社会面には、シールズの元メンバー諏訪原健氏のインタビューが掲載されていた。たとえ1年前のことであっても簡単に忘却してしまうほどに世の中は加速しているが、だからこそ、新聞には、言葉の力、記事の蓄積をもつて、社会の木鐸であり続けて欲しいと切に願う。(大隅書店代表)

大隅さんの評は今回で終わります。

京都でADI国際会議が開かれ

5月に入つてからは、施行70年